

## アラビヤナイト

### 一、アラジンとふしぎなランプ（菊池寛）

昔、いなのに、ムスタフという貧乏な仕立屋が住んでいました。このムスタフには、おかみさんと、アラジンと呼ぶたった一人の息子とがありました。

この仕立屋は大へん心がけのよい人で、一生けんめいに働きましました。けれども、悲しいことには、息子が大のなまけ者で、年が年じゅう、町へ行つて、なまけ者の子供たちと遊びくらしていました。何か仕事をおぼえなければならぬ年頃になつても、そんなことはまっぴらだと言つてはねつけますので、ほんとうにこの子のことをどうしたらいいのか、両親もとほうにくれているありさまでした。

それでも、お父さんのムスタフは、せめて仕立屋にでもしようと思ひました。それである日、アラジンを仕事場へつれて入つて、仕立物を教えようと思ひましたが、アラジンは、ばかにして笑つてゐるばかりでした。そして、お父さんのゆだんを見すまして、いち早くにげ出してしまいました。お父さんとお母さんは、すぐに追つかけて出たのですけれど、アラジンの走り方があんまり早いので、もうどこへ行つたのか、かひもなく、姿は見えませんでした。「ああ、わしには、このなまけ者をどうすることもできないのか。」

ムスタフは、なげきました。そして、まもなく、子供のことを心配のあまり、病氣になつて、死んでしまいました。こうなると、アラジンのお母さんは、少しばかりあつた仕立物に使う道具を売

りはらつて、それから後は、糸をつむいでくらしを立てていました。

さて、ある日、アラジンが、いつものように、町のなまけ者と一しょに、めんこをして遊んでいました。ところがそこへ、いつのまにか背の高い、色の黒いおじいさんがやつて来て、じつとアラジンを見つめていました。やがて、めんこが一しようぶ終つた時、そのおじいさんがアラジンに「おいで、おいで」をしました。そして、

「お前の名は何と云うのかね。」と、たずねました。この人は大へんしんせつそうなふうをしていましたが、ほんとうは、アフリカのまほう使でした。

「私の名はアラジンです。」

アラジンは、いったい、このおじいさんはだれだろうと思ひながら、こう答えました。

「それから、お前のお父さんの名は。」また、まほう使が聞きましました。

「お父さんの名はムスタフと云つて、仕立屋でした。でも、とつくの昔に死にましたよ。」

と、アラジンは答えました。すると、この悪者のまほう使は、

「ああ、それは私の弟だ。お前は、まあ、私の甥だつたんだね。私は、しばらく外国へ行つていた、お前の伯父さんなんだよ。」

と云つて、いきなりアラジンをだきしめました。そして、

「早く家へ歸つて、お母さんに、私が会いに行きますから、と云つておくれ。それから、ほんの少しですが、と云つて、これをあげておくれ。」と云つて、アラジンの手に、金貨を五枚にぎらせ

ました。

アラジンは、大いそぎで家へ帰って、お母さんに、この伯父さんだという人の話をしました。するとお母さんは、

「そりゃあ、きつと、何かのまちがいだらう。お前に伯父さんなんか、ありやあしないよ。」と、言いました。

しかし、お母さんは、その人がくれたという金貨を見て、ひよっとしたら、そのおじいさんはしんるいの人かもしれない、と思いました。それで、できるかぎりのごちそうをして、その人が来るのを待っていました。

まもなくアフリカのまほう使は、いろいろめずらしい果物や、おいしいお菓子をどっさりおみやげに持って、やって来ました。

「なくなつた、かわいそうな弟の話をしてください。いつも弟がどこに腰かけていたか、教えてください。」

と、まほう使は、お母さんとアラジンに聞きました。

お母さんは、いつもムスタフが腰かけていた、長いすを教えてやりました。すると、まほう使は、その前にひざまずいて、泣きながらその長いすにキッスしました。それで、お母さんは、この男はなくなった主人の兄さんにちがいない、と思うようになりました。ことに、このまほう使が、アラジンをなめるようにかわいがるのを見て、なおさら、そうときめてしまったのでした。

「何か、仕事をしているかね。」まほう使がアラジンにたずねました。

「まあ、ほんとうに、おはずかしゅうございますわ。この子は、しょっちゅう町へ行って、遊んでばかりいまして、まだ何にもしていないのびびりますよ。」

お母さんが手をもみながら、そう答えました。

アラジンは、伯父さんだという人が、じつと自分を見つめているので、はずかしそうに、うつむいていました。

「何か仕事をしなきゃあいけませんな。」

まほう使は、こうお母さんに言っておいて、さて、こんどはアラジンに、

「お前はいつたい、どんな商売がしてみたいのかね。私はお前に呉服店を出させてあげようと思つているのだが。」と、言いました。

アラジンは、これを聞くと、うちょうてんになつてよろこびました。

あくる日、伯父さんだという人は、アラジンに、りっぱな着物を一そろい買つて来てくれました。アラジンは、それを着て、この伯父さんだという人につれられて、町じゅうを見物して歩きました。

その次の日もまた、まほう使はアラジンをつれ出しました。そして、こんどは、美しい花園の中を通りぬけて、田舎へ出ました。二人はずいぶん歩きました。アラジンは、そろそろくたびれはじめました。けれども、まほう使がおいしいお菓子や果物をくれたり、めずらしい話を次から次と話して聞かせてくれたりするものですから、大してくたびれもしませんでした。そんなにして、とうとう二人は山と山との間の深い谷まで来てしまいました。そこでやっと、まほう使が足をとめました。

「ああ、とうとうやって来たな。まず、たき火をしようじゃあないか。かれ枝を少し拾つて来ておくれ。」と、アラジンに言いま

した。

アラジンはきつそく、かれ枝を拾いに行きました。そして、すぐ両手にいっぱいかかえて、帰って来ました。まほう使は、それに火をつけました。かれ枝は、どんどんもえはじめました。おじいさんはふしぎな粉こなを、ポケットから出しました。それから、口の中で何かぶつぶつ言いながら、火の上にふりかけました。すると、たちまち大地がゆれはじめました。そして、目の前の地面がぱつとわれて、大きな、まっ四角な平たい石があらわれてきました。その石の上には、輪わがはまっていました。

アラジンはこわがって、家へ走って帰ろうとしました。けれども、まほう使はそうはさせませんでした。アラジンのえりがみをつかんで、引きもどしました。

「伯父さん、どうしてこんなひどいことをするんです。」アラジンは泣きじゃくりながら見上げました。

「だって、私の言う通りにすればいい。この石の下には宝物たからものがあるのだ。それをお前に分けてやろうというのだ。だから私の言う通りにおし。すぐに出て来るからな。」

と、まほう使が言いました。

宝物と聞くと、アラジンは今までのこわさはすっかり忘れて、よろこんでしまいました。そして、まほう使の言う通りに、石の上の輪に手をかけると、石はぞうさなく持ち上りました。

「アラジンや、ごらん。そこに下へおりて行く石段が見えるだろう。お前が、その石段をおりきるとね、大広間おおひろまが三つならんでいるんだよ。その大広間を通して行くのだが、その時、外套がいとうがかべにさわらないように気をつけなきゃあいけないよ。もしさわった

が最後、お前はすぐに死んでしまうからね。そうして、その大広間を通りぬけると、果物くだもの壘ぼたけがあるのだよ。その中をまた通りすぎると、つきあたりに穴ぐらがある。その中に一つのランプがとぼっているからね、そのランプをおろして、中の油を捨てて持ってお帰り。」

まほう使はこう言いながら、おまもりだといって、まほうの指輪ゆびわをアラジンの指にはめてくれました。そして、すぐに出かけるようにと命令めいれいしました。

アラジンは、まほう使の言った通りにおりて行きました。何もかも、まほう使が言った通りのものがありました。アラジンは三つの大広間と果物壘を通りぬけて、ランプのあるところまで来ました。そこで、ランプをとって油を捨てて、だいじにふところにしまってから、あたりを見まわしました。

アラジンは、ゆめにさえこんな見事な果物壘を見たことがありませんでした。なっている果物がいろいろさまざまの美しい色をしていて、まるでそこら一面、にじが立ちこめたように見えるのです。すきとおって水晶すいしゅうのようなもありました。まっ赤な色をしていて、ぱちぱちと火花をちらしているのもありました。そのほか緑、青、むらさき、だいたい色などで、葉はみんな金と銀とできていました。この果物は、ほんとうはダイヤモンドや、ルビーや、エメラルドや、サファイヤなどという宝石ほうせきだったので、アラジンには気がつきませんでした。けれども、あんまり見事だったものですから、帰りにこの果物をとって、ポケットに入れておきました。

アラジンがやっと石段の下までたどりついた時、地の上では、

まほう使が一心に下の方を見つめて待っていました。そしてアラジンが石段をのぼりかけると、

「早く、ランプをおよこし。」と言って、手をのばしました。

「私がついて出るまで待ってくださいいな。出たらすぐにあげますから。ここからじゃとどかないんですもの。」と、アラジンは答えました。

「もっと手を持ち上げたらとどくじゃないか。さあ、早くさ。」

おじいさんは、おこった顔かおをしてどなりつけました。

「すっかり外へ出てから渡しますよ。」アラジンは同じようなことを言いました。

すると、まほう使は、はがゆがってじだんだをふみました。そして、ふしぎな粉をたき火の中へ投げこみました。口の中で何かぶつぶつ言いながら。そうすると、たちまち石がずるとふたをしてしまい、地面の上へかえる道がふさがってしまったのでした。アラジンはまっ暗な地の下へとじこめられてしまいました。

これで、そのおじいさんは、アラジンの伯父さんではないということがはつきりとわかりました。このまほう使は、まほうの力によって遠いアフリカで、このランプのことをかぎつけたのでした。このランプは大へんふしぎなランプなのです。そのことは、読んでゆくにしたがって、だんだん皆さんにわかってくるでしょう。しかし、このまほう使は、自分でこのランプをとりに行くことはできないのでした。だれかほかの人がとって来てやらなければ、だめなのでした。それで、アラジンにつきまとったわけです。そして、ランプさえ手に入ったら、アラジンを殺ころしてしまおう、と思っていたのでありました。

けれども、すっかりあてがはずれてしまいましたので、まほう使はアフリカへ帰ってしまいました。そして長い長い間、いなへは、やって来ませんでした。

さて、地の下へとじこめられたアラジンは、どこかにげ道はないかと、あの大広間や果物畠の方へ行ってみましたが、地面の上へかえって行く道はどこにもありませんでした。二日ふっかの間アラジンは泣きくりました。そして、どうしても地の下で死んでしまわなきゃならないのだと思いました。そして、両方の手をしっかりとにぎりあわせました。その時、まほう使がはめてくれた指輪にさわったのでした。

すると、たちまち大きなおぼけが、床ゆかからむくむくとあらわれ出て、アラジンの前に立ちはだかりました。そして、

「坊ちゃん、何かご用でございませうか。私は、その指輪の家来けらいでございませう。ですから、その指輪をはめていらっしやる方のおっしゃる通りに、しなければならぬのでございませう。」と、言うのです。アラジンはとび上るほどよろこびました。そして、

「私の言うことなり、どんなことでも聞いてくれるんだね。よし、じゃ、こんなおそろしいところからすぐつれ出しておくれ。」と、こうたのみました。

そうすると、すぐに地面へ上る道が開きました。そして、あつというまに、もう自分の家の戸口まで帰っていました。お母さんがアラジンが帰ったので、涙を流してよろこびました。アラジンもお母さんにだきついて、何度も何度もキッスしました。それから、お母さんにこの間からのいちぶしじゅうを話そうとしましたが、お腹なかがぺこぺこでした。

「お母さん、何かたべさせてくださいな。私はお腹がぺこぺこで死にそうなんです。」と、アラジンが言いました。

お母さんは、

「ああ、そうだろうとも、ねえ。だがこまったよ、もう家の中には、少しぼっちの綿わたよりほかには何にもないんだよ。ちょっとお待ち、この綿を売りに行つて、そのお金で何か買って来てあげよう。」と、言いました。

するとアラジンは、

「お母さん、待ってください。いいことがあります。綿を売るよりも、この、私の持つて帰つたランプをお売りなさいな。」と云つて、あのランプを出しました。

けれども、ランプは大へん古ぼけていて、ほこりまみれでした。少しでもきれいになったら、少しでも高く売れるだろうと思つて、お母さんはそれをみがこうとしました。

しかし、お母さんが、そのランプをこするかこすらないうちに、大きなまつ黒いおばけが、床ゆかからむくむくと出て来ました。ちょうど、けむりのように、ゆらゆらとからだをゆすりながら、頭が天じょうへとどくと、そこから二人を見おろしました。

「ご用は何でございますか。私はランプの家来でございます。そして私はランプを持つている方の言いつけ通りになるものでございます。」と、そのおばけが言いました。

アラジンのお母さんは、このおばけを見た時、こわさのあまり気をうしなつてしまいました。アラジンは、すぐお母さんの手からランプを引つたりりました。そしてふるえながら、自分の手に持つていました。

「ほんの少しでもいいから、たべるものを持つておいで。」

アラジンは、やつぱりふるえながら、こう言いました。おそろしいおばけが、やつぱり天じょうからならみつけていたものから。が、その時、ランプの家来は、しゅつとけむりを立てて消えてゆきました。けれども、またすぐに、金のお皿さぶらの上に上等のごちそうをのせて、あらわれて来ました。

この時、アラジンのお母さんは、やつと気がつきました。けれども、このごちそうをたべるのを、大へんこわがりました。そして、すぐにランプを売つてくれと、アラジンにたのみました。あのおばけが、きつと何か悪いことをするにちがいないと考えたのですから。けれどもアラジンは、お母さんのこわがつているのを笑いました。そして、このまほうのランプと、ふしぎな指輪ゆびわの使い方がわかつたから、これからは、この二つをうまく使つて、くらしむきのたすけにしようと思ふ、と言いました。

二人は金のお皿を売つて、ほしいと思つていたお金を手に入れました。そして、それをみんな使つてしまつた時、アラジンはランプのおばけに、もつと持つて来いと言いつけました。こうして、親子は何年も何年も楽しくくらししていました。

さて、アラジンの住んでいる町にあるお城しろの王さまのお姫ひめさまは、大へん美しい方だということでした。アラジンも、このうわさを聞いていましたので、どうかしてお姫さまを一度おがみたいと思つていました。それで、いろいろお姫さまをおがむ方法を考へてみましたけれど、どれもこれもみんなだめらしく思われるのでした。なぜかという、お姫さまは、いつも外へお出ましに

なる時は、きまったように、深々とベルをかぶっていらっしやうたからであります。けれども、とうとう、ある日、アラジンは王さまの御殿の中へ入ることができました。そして、お姫さまがゆどのへおいでになるところを、戸のすきまからのぞいてみました。

それからアラジンは、お姫さまの美しいお顔が忘れられませんでした。そしてお姫さまがすきですきでたまらなくなりまして。お姫さまは夏の夜のあけ方のように美しい方でした。アラジンは家へ帰って来て、お母さんに、

「お母さん、私はとうとうお姫さまを見て来ましたよ。お母さん、私はお姫さまをおよめさんにしたくなりました。お母さん、すぐに王さまのお城へ行って、お姫さまをくださるようお願いしてください。」と言って、せがみました。

お母さんは、息子のとうもない望みを聞いて笑いました。そしてまた、アラジンが気がいになったのではないかと思って、心配もしました。しかし、アラジンはお母さんが「うん」と言うまではせがみ通しました。

それで、お母さんは、あくる日、王さまへのおみやげに、あのまほうの果物をナフキンにつつんで、ふしようぶしようにお城へ出かけて行きました。お城には、たくさんの人たちがつめかけてうったえごとを申し出ておりました。お母さんは何だかいじけてしまつて、進み出て自分をお願いを申し上げることができませんでした。だれもまた、お母さんに気がつきませんでした。そうして、毎日々々、お城へ出かけて行って、やっと一週間めに王さまのお目にとまりました。王さまは大臣に、

「あの女は何者だな。毎日々々、白いつつみを持って、来てるよのだが。」と、おたずねになりました。

それで大臣は、お母さんに王さまの前へ進むように申しました。お母さんは、少し進んで、地面の上へひれふしてしまいました。

お母さんは、あんまりおそれ多いので、何も言うことができませんでした。けれども、王さまが大そうおやさしうなので、やっと勇氣を出して、アラジンにお姫さまをいただきたいとお願いしました。それから、

「これはアラジンが王さまへのささげ物でございます。」と言って、まほうの果物をつつみから出して、さし上げました。

あたりにいた人々は、こんなりっぱな果物を生れて一度も見たことがなかったものですから、びっくりして声を立てました。果物はいろいろさまざまに光りかがやいて、見ている人たちがまぶしがるほどでした。

王さまもおおろきになりました。そして大臣を別のへやお呼びになつて、

「あんなすばらしいささげ物をする事ができる男なら、姫をやつてもいいと思うが、どうだろうな。」と、ご相談なさいました。

ところが大臣は、ずっと前から、お姫さまを自分の息子のおよめさんにしたいと思つていたものですから、

「そんなにいいので約束をあそばさないで、もう三月ほど、待たせなさいまし。」

と、申し上げました。王さまも、なるほどそうだと思ひになりました。それで、アラジンのお母さんに、もう三月待ったら、姫をやるう、とおっしゃいました。

アラジンは、お姫さまがただけると聞いて、自分くらい仕合せ者はないと思いました。それから、一日々々が矢のように早くすぎてゆきました。ところが、それから二月もすぎたある夕方、町じゅうが大そうにぎやかなことがありました。アラジンは何事かと思つて人にたずねました。するとその人は、今晚、お姫さまが、大臣の息子のところへおよめにいらっしやるからだ、と教えてくれました。

アラジンはまっ赤になつておこりました。そしてすぐ家へ帰つて、まほうのランプをとり出してこすりました。すると、じきにあのおぼけが出て来て、何をいたしましようかと聞きました。

「王さまのお城へ行つて、お姫さまと、大臣の息子をすぐつれて来い。」と、言いつけました。

たちまちおぼけは御殿へ行つて、二人をつれて帰つて来ました。そしてこんどは、

「大臣の息子をこの家からつれ出して、朝まで外で待たしておけ。」と、命令めいれいしました。

お姫さまはこわがつて、ふるえていました。けれども、アラジンは、けつしてこわがらないでください、私こそはあなたのほんとうのおむごさんなのでございます、と申し上げました。

あくる朝早く、アラジンの言いつけた通りに、おぼけは、大臣の息子をつれて家の中へ入つて来ました。そして、お姫さまと一緒ににお城へつれて帰りました。

それからまもなく王さまが、

「お早う。」と言つて、お姫さまのおへやへ入つていらっしやいますと、お姫さまは涙をぼろぼろこぼして泣いていらっしやいま

した。そして大臣の息子は、ふるふるふるえていました。

「どうしたのかね。」と、王さまがおたずねになりました。けれども、お姫さまは泣いていて、何にもおっしやいませんでした。

その晩もまた、同じようにアラジンはおぼけに言いつけて、二人をつれて来させました。そしてもう一度、大臣の息子を家の外に立たせておきました。

次の日もやはり、お姫さまが泣いていらっしやるのを見て、王さまは大そうおおこりになりました。そして、お姫さまが何を聞いても、やっぱりだまつていらっしやるので、なおなおおこつておしまいになりました。

「泣くのをやめ、そして早くわけをお話し。話さないと殺してしまうよ。」と、おしかりになりました。

それで、やつとお姫さまは、おとといの晩からの出来事を、すっかりお話しになりました。大臣の息子はふるえながら、どうぞおむごさんになるのをやめさせてくださいまし、とお願ひしました。もうもう一晩だつて、あんな目にあうのは、いやだと思つたものですから。

そういうわけで、ご婚礼こんれいはおとりやめになりました。そしてい

ろんなお祝いもないことになりました。さて、いよいよ約束の三月の月日がたつてから、アラジンのお母さんは、王さまの前へ出ました。それで、やつと王さまは、お姫さまをこの女の息子にやると、お約束なすつたことを、お思ひ出しになりました。

「それでは、わしが言った通りにすることにしよう。だが、わしの娘むすめをおよめさんにする者は、四十枚の皿ひらに宝石を山もりにし

て、それを四十人の黒んぼのどれいに持たせてよきさなければいけない。そして王さまの召使らしい、りっぱな着物を着た西洋人のどれいが、その黒んぼのどれいの手を引いて来るのだぞ。」と、おっしゃいました。

アラジンのお母さんは、こまったことになったと思ひながら家へ帰つて来て、アラジンに王さまのお言葉をつたえました。

「アラジンや、そんなことは、とてもできないことじゃないかね。」  
そう言つてため息をつきました。するとアラジンは、

「いいえ、お母さん、だめじゃありませんよ。王さまにはすぐおせの通りにしてごらんに入れますよ。」と、いさぎよく言いました。

それから、まほうのランプをこすりました。そしておばけが出て来た時、宝石を山もりにした四十枚のお皿と、王さまが言われただけのどれいをつれて来いと言いつけました。

さて、それから、このりっぱな行列が町を通つてお城へ向いました。町じゅうの人々はぞろぞろと見物に出て来ました。そしてみんな、黒んぼのどれいが頭の上のせている、宝石を山もりにした金のお皿を見て、びっくりしました。お城へついて、どれいたちは王さまに宝石をさし上げました。王さまはずいぶんおどろきになりましたけれど、また大そうおよろこびになって、アラジンとお姫さまとがすぐに婚禮するようにとおっしゃいました。

お母さんが帰つて、このことをアラジンにつげますと、アラジンは、すぐにはお城へ行かれないと言いました。そして、まずランプのおばけを呼んで、香水ぶると、王さまがお召しになるような金のぬいどりのある着物と、自分のお供をする四十人のどれい

と、お母さんのお供をする六人のどれいと、王さまのお馬よりもっと美しい馬と、そして、一万枚の金貨を十箇のさいふに分けて入れて持つて来いと命じました。

さて、これらのものがみんなとのつてから、アラジンは着物を着かえてお城へ向いました。そして、りっぱな馬に乗つて四十人のどれいを召しつれて行くみちみち、両がわに見物しているたくさんの人たちに、十箇のさいふから金貨をつかみ出しては、ばらばらとまいてやりました。見物人たちは、きゃっきやつと言つて大よろこびで、それを拾いました。しかし、その中のだれにだつて、昔、町でのらくらと遊んでばかりいたなまけ者が、こんなになつたとは気がつきませんでした。これはきつと、どこかの国の王子さまだろうと思つていました。

こんなものものしいありさまで、アラジンがお城へつきますと、王さまはさっそくお出迎えになつて、アラジンをおだきになりました。それから家来たちに、すぐお祝いの宴会と、婚禮の用意をするようにとおっしゃいました。するとアラジンは、

「陛下、しばらくお待ちくださいまし。私はお姫さまがお住みになる御殿を立てますまでは、婚禮はできません。」と、申し上げたのであります。

そうして、家へ帰つて、もう一度ランプのおばけを呼びよせました。そして、

「世界一のりっぱな御殿を作れ。その御殿は、大理石と、緑色の石と、宝石とで作らなければいけない。そしてまん中に、金と銀とのかべとまどが二十四ついている大広間を作るのだ。それからそのまどは、ダイヤモンドだの、ルビーだの、そのほかの宝石で

かざらなければいけない。けれども、たった一つだけは何にもかざりをしないで、そのままにしておけ。それから、また馬やも作らなければいけない。そして、御殿の中には、たくさんのごれいもいなければいけない。さあ、これだけのことを早くやってくれ。」と、言いつけました。

あくる朝、アラジンは、世界一かと思われるほどの御殿が立っているのに気がつきました。御殿の大理石のかべは、朝日の光を受けて、うすもも色にそまっていました。まどには宝石がきらめいていました。

アラジンはさつそく、お母さんと一しょにお城へまいりました。そして、きょう婚礼をさせていたみたいと申し入れました。お姫さまはアラジンをごらんになって、アラジンと仲よくしようとお思いました。町じゅうはお祝いで大にぎわいでした。

そのあくる日は、王さまの方からアラジンの新御殿をおたずねになりました。そしてまず大広間へお通りになって、金の銀とのかべと、宝石をかざりつけたまどをごらんになって、大へんご感服かんぷくなさいました。そして、

「これは世界で一ばん美しい御殿にちがいない。わしには、この御殿の中にあるたった一つのものでさえ、世界第一の宝物のように思われる。だが、ここにたった一つ、かざりつけをしてないまどがあるのは、どういうわけだね。」

と、おたずねになりました。するとアラジンは、

「陛下、それは、陛下のとうとお手で、かざりつけをしていただきたいと存じまして、わざわざ残しておいたのでございませう。」と、お答えしました。

王さまは、大へんおよろこびになりました。そしてすぐにお城の装飾そうじやくがかりの人たちに、このまどをほかのまどと同じようにかざりつけるように、お言いつけになりました。

装飾がかりの人たちは、何日も何日も働きました。そして、まど、まどのかざりつけが半分もできないうちに、持っていた宝石をすっかり使つてしまいました。王さまにこのことを申し上げますと、それでは自分の宝石をみんなやるから使うように、とおっしゃいました。それを、使いはたしても、なおまどは出来上りませんでした。

それで、アラジンは、かかりの人たちに仕事をやめさせて、王さまの宝石を全部返してしまいました。そして、その晩もう一度ランプのおぼけを呼びました。それで、まどは夜のあける前に出来上りました。王さまと、装飾がかりの人たちは、おどろいてしまいました。

けれども、アラジンはけつして自分のお金持であることをまごんしませんでした。だれにでもやさしく、礼儀れいぎただしくつきあっていました。そして貧乏人にはしんせつにしてやりました。それでだれもかれもアラジンになつきました。アラジンは、また王さまのために、何度も何度も、戦争に行つててがらを立てました。それで、王さまの一番お気に入りのお家になりました。

けれども、遠いアフリカでは、アラジンをいじめ悪たくみが、ずっと考えつづけられていました。あの伯父さんだといってだました悪者のおじいさんのまほう使は、まほうの力によって、自分が地の下へとじこめてしまった男の子が、あれから助かって、大

へんな金持になったということを知ったからであります。そして、おこつて自分のかみの毛を引きむしりながら、

「あいつめ、きつとランプの使い方をさつたのにちがいない。おれは、ランプをとり返す方法を考えつくまでは、いまいまして、夜もおちおちねむることができない。」と、どなつていたのであります。

それから、やがてまた、いなへやつて来ました。そしてアラジンの住んでいる町へ来て、すばらしい御殿を見ました。御殿があんまり美しいのと、アラジンがお金持らしいのに腹が立って、息がとまつてしまうほどでした。そこで、まほう使は商人にばけました。そして、たくさんの銅どうで作つたランプを持って、「ええ、新しいランプを古いランプととりかえてあげます。」

町から町へ、こう言いながら歩きました。

この呼び声を聞いて、町の人たちは、ばかけたことだと笑いながら、めずらしそうにまほう使のそばへたかつて来ました。こんなことを言う男は、気がいかも思れないと思つたのですから。

ちようごこの時、アラジンはかりに出て、るすでした。お姫さまはただ一人、大広間のまどによりかかつて、外の景色けしきをながめていらつしやいました。町から聞えてくる呼び声が、耳に入ったものですから、さっそくどれいをお呼びになりました。そして、「あれは何と言つているのか聞いておいで。」と、おっしゃいました。

すぐにどれいは聞いて帰つて来ました。そして、さもさもおかしくてたまらないというふうに笑いながら、

「ずいぶん、へんなおじいさんなのでございますよ。新しいランプを古いランプととりかえてあげます、と申すのでございます。そんなばかげたあきないがございますでしょうかねえ。ほほほ…」と、申し上げたのでございました。

お姫さまも、これをお聞きになつて、大そうお笑いになりました。そして、すみの方のかべにかかつていたランプを、指さしになつて、

「そこにずいぶん古ぼけたランプがあるじゃないか、あれを持つて行つて、そのおじいさんが、ほんとうにとりかえてくれるかどうか、ためしてごらん。」と、おっしゃいました。

どれいはランプをとりおろして、町へ走つて行きました。まほう使は、まほうのランプを両手でしっかりと受けとつてから、「どれでも、おすきなのお持ちください。」

と言つて、新しい銅のランプをたくさんならべたてました。そして古いランプをだじそうにだきしめて、ほかのことは何にも気がつかない様子ようすでありました。このどれいが、新しいランプをみんな持つて行つたつて、きつと気がつかなくなつたでしょう。

それからまほう使は、少し歩いて、町はずれへ出ました。そして、だれも通つていないのを見すまして、まほうのランプをとり出しました。そしてしずかにこすりました。するとたちまち、あのおばけが、目の前へ立ちはだかつて、「何のご用ですか。」と聞きました。

「お姫さまを入れたまんま、アラジンの御殿を、アフリカのさびしいところへ持つて行つて立ててくれ。」と、まほう使が言いました。

すると、またたくまにアラジンの御殿は、お姫さまや、家来たちを入れたまんま、見えなくなってしまうました。まもなく、王さまが、お城のまどから外をおながめになって、アラジンの御殿がなくなっているのにお気づきになりました。

「しまった。アラジンはまほう使だったのだな。」

王さまはこうおっしゃって、すぐに家来を召して、アラジンをくさりでしばってつれて来い、とお命じになりました。家来たちは、かりから帰って来るアラジンに行きあいましたので、すぐにつかまえて、王さまの前へつれて来ました。町の人々は、アラジンになついていたものですから、アラジンが引かれて行くそばへよって来て、どうか、ひどい目にあわないようにと、おいのりをしてくれました。

王さまはアラジンをごらんになって、大へんおしかりになりました。そして家来に、すぐアラジンの首を切れとおっしゃいました。けれども、町の人たちがお城へおしかけて来て、そんなことをなすつたら、しょうちしません、と行って王さまをおどかしました。それで仕方なく王さまは、アラジンのくさりをといっておやりにになりました。

アラジンは、どうしてこんな目におあわせになったのかと、王さまにおたずねしました。王さまは、

「かわいそうに、何にも知らないのか。まあここへ来てごらん。」と、おおせになりました。

そしてアラジンをまどのところへつれて来て、アラジンの御殿が立っていたところが原っぱになっているのを、指さして教えておやりになりました。

「お前の御殿はともかく、姫はどこへ行ったのだろう。わしのだいなだいな娘はどこへ行ったのだろう。」と言って、王さまはお泣きになりました。

アラジンはおどろきのあまり、しばらくは口がきけませんでした。どこへ御殿が行ってしまったのだろうか、原っぱを見つめたまんま、だまって、ぼんやり立っていました。

しかし、しばらくして、やっと口をきりました。

「陛下、どうか私に一月のおひまをくださいませ。そして、もしもその間に私がお姫さまをつれもどすことができませんでしたならば、その時、私をお殺しになってくださいませ。」と、申し上げたのであります。

王さまはおゆるしになりました。アラジンはそれから三日の間は、気ががいのようになって、御殿はどこへ行ったのでしょうか、とあう人ごとにたずねてみました。けれども、だれも知りませんでした。かえって、アラジンが悲しんでいるのを笑ったりしました。それでアラジンは、いっそ身を投げて死のうと思つて、川のほとりへ行きました。そして、土手にひざまずいて、死ぬ前のおいのりをしようとして、両手をしっかりとにぎりあわせました。その時、知らずにまほうの指輪をこすつたのでした。するとたちまち、指輪のおばけが目の前につつ立ちました。

「どんなご用でございます。」と、言うのです。アラジンは大それうよろこびました。そして、

「お姫さまと、御殿を、すぐにとり返して来てくれ、そして私の命を助けてくれ。」

と、たのみました。ところが、指輪の家来は、

「それは、あいにく、私にはできないことでございます。ただ、ランプの家来だけが、御殿をとりもどす力を持っているのでございます。」と、答えたのであります。

「それでは、御殿があるところまで私をつれて行ってくれ。そして、お姫さまのへやのまどの下へ立たせてくれ。」

アラジンは仕方がないので、こうたのみました。この言葉を、言いきってしまわないうちに、もうアラジンはアフリカについて、御殿のまどの下に立っていました。

アラジンは大へんくたびれていたものですから、そこでぐっすり寝こんでしまいました。しかし、ほどなく夜があけて、小鳥の鳴く声で目をさました。その時は、もうすっかり、もとのような元気になっていました。そして、こんな悲しい目にあうのは、きつとまほうのランプがなくなったせいにはちがいない、だがぬすんだかを見とどけなければならぬ、と、かたく決心しました。

さて、お姫さまは、この朝は、ここへつれて来られてからはじめて、きげんよくお目ざめになったのでした。太陽はうらうらとかがやいて、小鳥は楽しそつにさえずっていました。お姫さまは、外の景色でもながめようと思つて、まどの方へ歩いておいでになりました。そして、まどの下にだれか立っている者があるのを、ごらんになりました。よくよく見ると、それはアラジンでありました。

お姫さまは声を立てておよろこびになって、いそいで、まどをお開きになりました。この音でアラジンは、ふっと上を見上げたのであります。

それから、アラジンは、いくつもいくつもの戸をうまく通りぬ

けて、お姫さまのへやへ入って行きました。そして、うれしさのあまり、お姫さまをしばらくだきしめていましたが、やがて顔を上げて、

「お姫さま、あの大広間のすみのかべにかけてあった、古いランプがどうなったか、ご存じではございませんか。」と、申しました。

するとお姫さまは、

「ああ、だんなさま、私どうしましょう。私がうっかりしていたので、こんな悲しいことになってしまったんです。」と言つて、あのおじいさんのまほう使が、商人の風をして来て、新しいランプと古いランプととりかえてあげると言つて、こんなことをしてしまつたお話をなさいました。そして、

「今も持っていますよ。いつだつて、上着の中へかくして、持ち歩いていきますよ。」と、おっしゃいました。

「お姫さま、私はそのランプをとり返さなきやなりません。ですから、あなたもどうか私にかせいでくださいませ。今晚、まほう使があなたとご一しょに、ごはんをたべる時、あなたは一番いい着物を着て、そしてしんせつそうなふうをして、おせじを言つてやってくださいませ。それから、アフリカのお酒が少し飲みたいたとおっしゃいませ。するとあの男が、それをとりに行きますからね。その時が来たら、私がまたあなたのおそばへ行つて、こうしてくださいませ、と申し上げますから。」

さてその晩、お姫さまは一番いい着物をお召しになりました。

そして、まほう使が入つて来た時、にこにこして、いかにもしん

せうそうなふうをなさいました。まほう使が、これはゆめではないかと思つたほどでした。なぜかというと、お姫さまは、ここへつれて来られてからというものは、いつもいつも悲しそうな顔をしているか、そうでない時は、おこつた顔をしていらつしやるかでしたから。

「私、たぶん、アラジンは死んでしまったのだらうと思ひますの。ですから、私、あなたのおよめさんになりたいと思つています。まあ、それはともかく、さあ、ごはんにしましょう。おや、きょうもやっぱり、しなのお酒ですね。私、しなのお酒にはもうあいてしまいましたから、アフリカのお酒を持って来てくださいな。」と、お姫さまがおつしやいました。

アラジンは、そのまに、粉を用意して来て、お姫さまに、ご自分のおさかずきの中へ入れてください、とたのみました。そして、まほう使がアフリカのお酒を持って帰つて来た時、お姫さまは、粉を入れたおさかずきに、そのお酒をなみなみとおつぎになりました。そして、これから仲よくなるしすから飲んでください、と言つて、まほう使におさしになりました。まほう使はよろこんで、それに口をつけました。しかし、それをみんな飲みほさないうちに、床ゆかの上にたおれて死んでしまいました。

アラジンは、かくれていた次のへやからとんで出て来て、まほう使の上着の中をさがしました。そして、まほうのランプをとり出して、大よろこびでそれをこすりました。

おぼけが出て来ますと、すぐに御殿をしなへ持つて帰つて、もとの場所に立てるようと言いつけました。

次の朝、王さまは大そう早く目をおさましになりました。王さ

まは悲しくておねむりになることができなかつたのです。そして、まどのところへ行つてごらんになると、アラジンの御殿が、ものところ立っているではありませんか。王さまは、うそではないかと思ひになりました。それで何べんも何べんも目をこすつては、じつと御殿の方をごらんになりました。

「ゆめではないのかしら。朝の光を受けて前よりももっと美しく見える。」とおつしやいました。

それからまもなく、馬に乗つて、アラジンの御殿をさして、走つていらつしやいました。そして、アラジンとお姫さまとを両手にだぎしめて、およろこびになりました。二人はアフリカのまほう使の話をしてお聞かせしました。アラジンはまた、まほう使の死がいもお目にかきました。

それからまた、昔のような楽しい日がつづきました。

しかし、まだもう一つアラジンに心配が残つていました。それは、アフリカのまほう使の弟おとうとも、やっぱりまほうを使つていたからです。そして、その弟は、兄さんよりもっと悪者だつたからであります。

はたして、その弟がかたきうちのために、しなへやつて来ました。アラジンをひどい目にあわせて、まほうのランプをぶんどつて来ようと決心して来たのであります。そして、しなへつくすとすぐに、こつそり、まずファティマという尼あまさんをたずねて行きました。そして、上着とベールとを、むりやりにかしてもらいました。それから、このことがほかの人に知られてはいけなと思つて、尼さんを殺してしまいました。

さて、この悪者のまほう使は、尼さんの上着とボールとをつけて、アラジンの御殿の近くの町を通りました。町の人々は、ほんとうの尼さんだと思って、ひざまずいてその上着にキッスしました。

まもなく、お姫さまは、ファティマが町を通っているというところをお聞きになりました。それで、すぐ御殿へ来てくれるようにと、使をおやりになりました。お姫さまは、ファティマをしじゅう見たい見たいと思っていらつしたものですから、尼さんが来た時、大へんていねいにおもてなしなさいました。そして大広間へつれておいでになって、同じ長いすに腰こしかけながら、「このへやがお気に召しまして。」と、お聞きになりました。

まほう使はボールを深くかぶつたままで、

「ほんとうに、目がさめるほどおきれいでございますこと。ですけども、私のおへやに、たつた一つほしいと思うものがございますのよ。それはほかでもございませぬ、ロック鳥ちやうの卵が、あの高い天じょうのまん中からぶらさがっていたら、もう申し分なしだと思えますわ。」と、答えました。

これをお聞きになってお姫さまは、何だか急に、この大広間がものたりないように思いはじめになりました。そして、アラジンが入って来た時、大へん悲しそうな顔をしていらつしやいました。アラジンは、何事が起つたのですか、とたずねました。お姫さまは、

「私、この天じょうから、ロック鳥の卵がぶらさがっていなきゃあ、何だか悲しいんですもの。」と、おっしゃいました。

「そんなことなら、ぞうさないじゃございせんか。」と、アラ

ジンはこともなげに言つてランプをおろして、廊下ろうかへ出てあのおばけを呼びました。

けれども、ランプのおばけは、その命令を聞くと、大へんおこりました。顔をぶるぶるふるわせながら、アラジンをしかりつけました。

「大ばか者、そんなものを私がやられると思つていいのか。お前は私のご主人を殺して、あの天じょうからぶらさげてくれというのか。そんなばかは、死んでしまふがいいや。」

おばけの目は、まるで石炭がもえている時のように、まっ赤になつていました。しかし、やがて言葉をやわらげて、

「だけれども、それはお前の心から出た願いでないということ、私はよく知つているのだよ。それは尼さんおまの風をしている、悪者のまほう使が言わたのだろう。」

と、言いました。そして、おばけは消えました。アラジンは、お姫さまが待つているへやへ、いそいで行きました。そして、

「私は、ずつうがしてなりません。尼さんをお呼びくださいませんか。あの方のお手でさすつていただいたら、きつとなおるだろうと思えます。」と、お姫さまに申しました。

すぐに、にせのファティマが来ました。アラジンはとびついて、その胸へ、短刀たんとうをつきさしました。

「どうなすつたのです。まあ、あなたは尼さんを殺すのですか。」お姫さまは泣き声でとがめました。

「これは、尼さんではございませぬ。これは私たちを殺しに来たまほう使です。」と、アラジンが申しました。

こんなにして、アラジンは二人の悪いまほう使の悪たくみから

のがれました。そして、もうこの世の中には、だれもアラジンの仕合せのじやまをする者はなくなりました。

アラジンとお姫さまは、長い間たのしくくらししました。そして、王さまがおかれになった時、二人はどうとう、王さまとおきささまになりました。そして国をよくおさめました。いつまでもいつまでもその国はさかえたということです。